各支部の自主性で
主婦会未加入者の手続決る

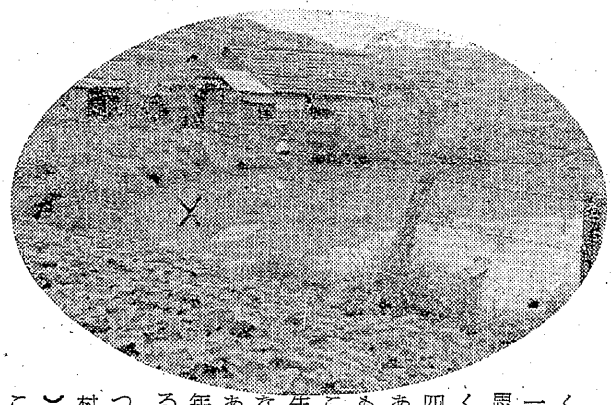
離産で産む声をあげた炭婦協はその後いくたの激しい闘争の中からたくましい足どりを示して、その後名称も三鉱主婦会と改称し、五月末現在で一万三千百五十一名という大世帯へと発展してきた。未加入者の加入も毎月少しづつ上昇しており、すでに一万四千余名数えるほどになつているが、主婦会ではこんど、これから未加入者の人たちの主婦会加入にどういう取扱いをするか、統一しようという声も出ていたが、二十一日の分会長会議で論議した結果、各支部の自主性に応じてこの加入を取扱うことになつた。

この未加入者取扱い統一については、現在の主婦会規約にも具体的に打出していず、各分会でまちまちであつたので、この際統一しようということになつたのが原因にもなつているもようである。

例えば四山では本人の理由書と分会長の推せん状という形式をとり加入の手続をやつているし、四山を除く他支部ではだいたい分会長の推せんで行つていきたい空気だつた。

支部の状況が違うので統一するのには無理があるということで、各支部の自主性にまかせられることとなつた。

また転居した場合には転居証明書を前分会長よりもらつて、転居先の分会長に届出ることになつている。特別会員については従来通り問題がなければ取扱つて行く事にきまつた。



また大平で水厄
心配てならぬ主婦

水魔は夏ばかり招くとはかぎらない。一寸の油断不注意で思わぬ災厄が降つてくることがある。

四山支部大平社宅にある堤はこれまでにも子供が誤つて落ちこんだりして危うく生命をなくするようなことが数回となくあつており、つい昨年も死者を出しているほどである。

つい先日の十日にも村上均ちゃん（三才）が強風のため落ちこみ危うく溺死しようとしたところを附近の人が通りかゝつたゝめ、一命はとりとめることができたが、またまた十五日午後二時ごろ四山内運吉賀五一さんの長男晴夫ちゃん（七才）が魚つりに行き危つて足をすべらせ堤に落ちこんだが、これも折よく発見した吉武昇さん（四山カツペ）が飛こんで救助に当つたゝめ、溺死をまぬがれた。

相つぐ災厄であり地域の間にもこれは何とかしなければという声が起つているが、同堤はちようど社宅の中にあり、周囲は畑だが東側が通路になつている。この通路には現在鉄条網のサクが施してあるが、畑のところはサクが崩れさつており全然ないところもあるほどで、またこゝには魚もおり天気のよいときには魚つりする人の姿もしよつちゆうみられるほどである。子供に水遊びは楽しいものであり無中にならせるものだが、これが子供たちをこの堤に引つけるのだろうが、一度あることは二度も三度もあるものだ、子供に絶対近寄らせないことも大切だが、周囲の人がこれを注意し合い、よその子供にでも自分の子供に対する愛情で注意し合うことも大切であろうそれとゝもに、完全なサクの設置が、一日も早くされるよう希望されている。

大平主婦の一人は

去年も死人が出たことだし、毎年落ちこむ人がいるので子供には十分注意しています。けれども私の目をかすめて遊びに行つているときもあり心配でなりません。中に入れない丈夫なサクをこしらえてもらいたいと思つています。

と心配していた。

四方八方こぼれ話

問題の白手袋

組合結成十周年記念を祝して、本来の労働組合運動に立脚した組合歌を募集することが決定され、十九日応募を〆切つた。

いろいろあるが断然多いのは「いざ奮い立て三鉱労組」「光栄あれ三鉱労組」という文句が多かつた。早速教宣部では中央の方へその選者を依頼したところ、歌詩選者に中尾トミ子女史、作曲に小林秀雄氏（青年行進曲作曲）を紹介して来た。二十日正午頃大牟田駅に中尾女史のみ到着するという連絡があつたので、大牟田は初めての女史が迷子になると気の毒だとニュース・カーで大牟田駅にいつたところ、それらしい人も見当らない。教宣部員の両名も困つていると、主婦会の書記である岩山青年が「あの人ちやろ、手袋はめとらすケン」「モシモシ」と聞いたところ、ケンモホロホロの返答に日頃強心臓も了然の状態であつた

紙幣を刷って

十五日の午後本部の印刷工場へ青、赤インクを使つた、アヤシゲな葉書が郵送されて来た。その内容を要約すると

私はこんど紙幣印刷をしたいと思つているので、組合の印刷工場で出来ませんか。出来ない時は近くの印刷工場に頼んで下さい。印刷する場合は、その紙幣の裏に一〇・〇〇〇円に使用出来る、貨幣臨時増減係、内閣印刷局臨時部と記入して下さい。印刷料は一枚五十銭くらいでして下さい。

とあつた。印刷工場担当の縄巣部長、ワガ社が世間に認められるのはよいが、紙幣まで印刷して呉れとは……と嘆き、九千九百九十九円五十銭も儲けようという、フラチナ奴の名前はと表面を見たら

テムナウ　テンノー　ツモリと書いてあつた。

人の短を言うことなかれ、己の長を説くことなかれ

歌ごえ發表

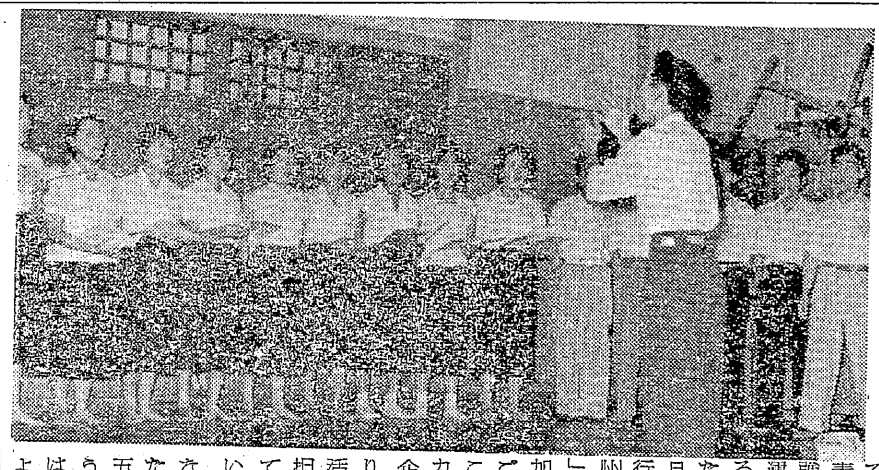
十一月一日から日本の歌声三川支部では待望されていた合唱サークル歌う会が去る八月三十一日に新たに発足した。会員三十六名、発足と同時にたちに練習を行つているがまず手はじめに地域進出が企画され九月十七日午後六時から新港、小浜で発会式をかねて歌ごえを発表した。今後強力な歌ごえ運動を展開するが、さしあたつては廿三日に大分市で行われる「九州のうたごえ」には全員参加すると意気ごんでおり、このため資金カンパなども企画されており今後の文化活動の一翼を担うものとして期待されている。

なお九州のうたごえに続き五六年日本のうたごえ祭典は十一月一日より三日間会場を東京都体育館に当てゝ開催されることに決定した。

三日間をとおして夜間に大交流会を行い、日昼は小交流会として産業別交流会、民謡、創作発表会討論形式による話合い、このほか踊りの発表、交流、フォークダンスの会なども企画されている。

また昨年の混乱を繰返さないため、県、産業別の代表制をとり、大合唱一本のやり方から、今年は地方ごとの代表演奏、大合唱の二本だてとなるもようである。

（写真は小浜地域で歌う三川歌う会）



海の外ここトピック

世紀の牛泥棒

濠洲ブリスベーン市では目下今世紀最大と思われる牛泥棒を捜査中という。この牛泥棒は牧場から放し飼いされていた牛八百頭を盗み出したもの。この牛、畜殺して売りとばしても一千五百八十四万円になるそうである。（AP）

あいさつして脱獄

看守と大立回りを演じたあげく血みどろで脱出するのが脱獄囚だと思つたら、アメリカのノースカロライナ州ダンベリ刑務所に暴犯罪で捕れていたダンカン、アイランドの両人、十二日同刑務所の表門からゆうゆう退散に及びアツケにとられている看守に丁重な別れのアイサツを述べた。ノースカロライナ州の法律では看守が暴犯罪者に発砲する権限がなく、とまどつているうちに両人はまんまと脱獄に成功した。（AP）

一歳で七貫匁とは

中共の南京市に生後一年一カ月で体重六貫七百二十匁という未曾ろしい赤ちゃんがいる。この百貫デブの卵は国営南京電球工場のボイラー工の子で、生れて間もなく歯が生えだし、いまでは十六本もある。デブではあるがアンヨもうまく「身体の各部分とも非常に丈夫で知能も正常、非常に珍らしいので今後も精密な調査研究をつづける」と医者は云つている。（RP）

百才以上が四万一千名

ソ連では長生きするものが多いといわれているが、十六日発行の「オゴニョーク」誌によると、現在ソ連には百才以上のものはなんと四万一千名、それもグルジアやアルメニヤに多いが、彼らは決して禁欲主義者や菜食主義者ではなく今年百五十才になるホダ・グシノフというおじいさんは十七才のとき結婚、老夫人とも健在であるそうだ。では長生きの秘決は？というと新鮮な山の空気を吸い、できたてのブドウ酒を飲むことだそうだ。（AFP）

お手盛歳費か
大牟田市の市議手当

地方自治法の改正で議員の給与が改正され「歳費以外は一切支払つてはならぬ」ことになつたが、これではいままでの実収入が減るので大牟田市議会がお手盛条例を立案した。と二十一日の商業新聞では報道している。

これは九月一日から施行された地方自治法改正で市会議員などの歳費や期末手当などが、条例できめられたほかは、いかなる名目の金も出せないことになつている。すでに東京や大阪では議員お手盛をやつて相当な市民の非難を浴びているが、大牟田の場合でもこれと同じお手盛であろうか。

なくなる期末手当

これに対して政治局の広沢市議はつぎのような説明を行つている。

こんどの自治法の改正で期末手当と報酬以外は支給してはならない何かの方法で残して行こうということになり、いままでの調査研究費五千円と退職慰労金五万円というものが出せなくなつた。

市議の報酬は二万二千円（役職のない議員）これに五千円の調査研究旅費で二万七千円が議員の手当となつていたのだが、このうちの研究費というのが税金のかからない性格だつた。退職慰労金がなくなつたことは革新側としては前から叫んでおつたことなので、この趣旨が法によつて通つたものとして喜んでいるが、新聞では市会議員のお手盛だということで問題になつている。五千円をどうするかということが問題になつているが、(1)にはこのさいすつきりと二万二千円と五千円を合計して二万七千円（税込）にしよう、手当が少し減るがスジを通すようというのだ　(2)一本化するのはスジが通つてよいが手取額が少くなるのはおかしい　(3)税金をなるべく少くするため二千か三千円を報酬にプラスして残りを以上の空気が市議会の中に流れていた。

委員会に日当

革新側の態度としては、将来も議員の報酬が削られて行くということは、市会議員が名誉職に追いやられるということから市議に革新陣営から出ないというけいかいすべきところもあるという態度をとつている。

結局この二万二千円の報酬は従来通りとし五千円を費用弁償の形をとり一日当り委員会に出たとき五百円を支給するとよいということになつた。これは新聞で言う二万七千円まるまる受取るお手盛条件ということには決してならず、議会内でも各委員会によつて出席日数が違うのでバラバラであり、出ただけの日数で支払われるので、中には以前よりも多くなる人があるかわりに、一方ではずつと少くなる人も出てくるわけである。出席日数の不均衡を何とか操作しないかという声もあつたが、革新側ではこれをはねつけている。と説明している。

（上）年寄りを慰めるよい子たち
（下）喜ぶ老人たち（於銀水社宅）

母親大会報告会開く
十五日・市民会館で

さきに東京で行われた「日本母親大会」は盛況裡に開催され、日本全国から参加した四千のお母さんたちの胸に新たな感激を与えてすこやかな子供の成長や平和な日本の建設に向つて日常活動を行うことを誓わせた。

大牟田では九月十五日午後一時から市民会館でこの「母親大会」の報告会が参加者によつて開催された。会場一杯になるほどつめかけた大牟田のお母さんたちは、それぞれの報告者の言葉にじつと耳をかたむけて熱心に聞き入つていた。

なお報告者は、原水爆禁止世界大会を地域の吉川ソノさん、母親大会の第一日目の報告を三鉱主婦会古賀スミエさん、分科会の母と女教師の会を高教組の中河原、森スミエさん、第三分科会を自労の島田ユキ子さん、第三日の全体会議を橋爪キヨメさん、大会宣言文を三鉱主婦会の板井スミエさんによつて行われた。

各地域で敬老會開く

九月十五日は「としよりの日」この日はとしよりを大事にする日である。製作支部銀水社宅では主婦会、地域分会で老人たちを保育園に招いて楽しい慰労の夕を催した子供たちや主婦がそれぞれ装いをこらして舞踊などを披露すれば老人たちもこの日ばかりは孫のことも忘れ果て、この楽しい慰安に目を細めて喜びあつていた。

× ×

本所支部白井建設分会でも地域職組の婦人会と話合つて、一緒にこの日行つた。七十才以上の老人三十四名、例年記念品とお茶を出して浪曲、万才、または婦人会の踊りなどで慰労していたが今年は趣向を変えて婦人会で心をこめてつくつた赤飯に目出鯛の尾頭つき折詰とお神酒を用意した。

この日は敬老会にふさわしく楽しい雰囲気につつまれ、老人たち同志で若き日の思出話や唄や踊りも飛び出すありさまで、演芸のない敬老会を心配していた主婦会では大喜びだつた。

一人のおじいさんは「一番いままでに嬉しかつたことは息子が戦地から帰つてきたことで、一番悲しかつたことはつれあいに死なれたとき」としみじみ申されていた。

なおこのほか各地域でも敬老会がこの十五日のとしよりの日を中心に盛に行われており、十八日に四山支部では敬老会を高瀬保養所でまた二十六日には緑ガ丘などでもそれぞれ計画されている。